

リカードウ『利潤論』に関する一考察

近 野 登

I はじめに

穀物法論争のまっただなかの1815年に出版された『穀物の低価格が資本の利潤におよぼす影響についての試論』⁽¹⁾(以下では『利潤論』と略す)は、その穀物法論争に積極的に参加するリカードウの立場を示している(時論としての『利潤論』)。と同時に、それは1817年に出版されたリカードウの主著である『経済学および課税の原理』(以下で『原理』と略す)の原型を示している。この原型というとらえ方は、それについてのスラッファの論文⁽²⁾が発表されていらい、世界的に大きな問題として考えられてきた。特に日本では、スラッファの主張の当否を調べるなかで、『利潤論』の前後のリカードウの手紙をも検討し、リカードウ経済学の成立過程を考察する研究が「初期リカードウ研究」という形で近来多くの論者⁽³⁾によってなされている。

私はこの小論で「初期リカードウ研究」を『利潤論』の検討に限定する。その理由は以下のことにある。『利潤論』には、i) それが『原理』以前の最初で唯一の理論的著作であること、ii) 当面の穀物法論争にたいして政策的提言としての自由貿易が主張されている——『原理』と同一の主張——こと、iii) その自由貿易政策を支える「一般的原理」(あくまでも『利潤論』段階での)がのべられていること、iv) その「原理」には後に『原理』をリカードウに書かず根本的欠陥が含まれていて、この欠陥の克服の仕方にこそ『原理』体系に独自性を持たせたこと、の特徴があり、私はその特徴からリカードウ経済学の成立をうながすものが『利潤論』、特にその理論部分にあると考えるからである。

したがって、私はこの小論では『利潤論』を対象をしぼる。最初に『利潤論』の理論構造を分析し、次いでその理論に内在する矛盾を指摘する。その矛

盾の克服等々のことは別稿でおこなう予定である。

Ⅰ 『利潤論』の理論分析

ここでは『利潤論』の前半部分でのべられている理論を分析する。(一)では利潤論の一般的原理を説明し、(二)ではその「一般的原理」の関連のういでふれられている価値規定の問題を扱う。

(一)

『利潤論』は最初から地代と利潤との関係を考慮に入れて論理を展開している⁽⁴⁾。リカードウは「一般的原理」の展開をおこなうために基本的モデルを作っている。そのモデルは「生産に必要な諸支出」、すなわち「生産の費用」、利潤、地代から構成されている。但し、生産物の価値が「生産の費用」と等しければ、利潤や地代——剰余生産物——は存在しない。リカードウはこの3つの構成要素からなるモデルを使って現実の分析をおこなう。その現実への歩みは、商品の価値規定を捨象した生産物（使用価値）視点からの分析、そして商品の価値規定を導入した交換価値視点からの分析、という形で『利潤論』ではおこなわれている。種々の段階での3つの構成要素の変化をリカードウは考察している。

1 生産物視点による分析

土地所有が存在しない場合⁽⁵⁾。この場合には、地代が存在せず、全剰余生産物は利潤となる。これをリカードウは次のように示している。

「もしこのような土地に投下された一個人の資本が小麦200クォータの価値⁽⁶⁾をもっており、そのうちの半分は建物や器具などの固定資本と、他の半分は流動資本から成っていたとして、もし固定資本と流動資本とを更新したあとに残る生産物の価値が小麦100クォータあるいは小麦100クォータと等しい価値をもっていたとすれば、資本の所有者にたいする純利潤は50パーセント、つまり200の資本にたいする100の利潤であろう。」(p. 10)

ここでの一般的利潤率は、資本移動による均等化作用⁽⁷⁾により50パーセントとなる。

土地所有が存在し、資本蓄積による劣等地耕作がおこなわれる場合。リカードウは論理の筋道をハッキリさせるために2つの前提をおいている。i) 農業上にはなんらの改良も生じないこと。ii) 資本と人口とは適当な比率で増加する、したがって「実質賃銀」(p. 12)は変化しないこと。

資本蓄積による劣等地耕作のため「土地の豊度が等しいと仮定しても、生産物をそれが生産された場所から消費される場所へ運ぶために、より多くの労働者や馬などを使用することが必要」(p. 13)となり、同一量の生産物(300)を得るために追加資本(10)が投下される。最劣等地では剰余生産物は減少し、利潤は90(300-210)となり、利潤率は $50\left(\frac{100}{200}\right)$ パーセントから $43\left(\frac{90}{210}\right)$ パーセントへ低下する。

既耕地の利潤率も「資本の一般的利潤は農業に投下された最も不利な資本によってえられる利潤によって規制される」(p. 13)から43パーセントに低下する。利潤は86(0.43×200)となり、その残りの剰余生産物が14(100-86)となる。ここにおいて、既耕地の全剰余生産物は、劣等地耕作により分割が生じ、利潤と地代⁹⁾とに分かれる。その結果、地主と農業資本家との間に剰余生産物の配分関係が生じる。

非農業部門である「産業」(p. 14)の利潤率は、農業利潤率に規制されて、43パーセントに低下する。

この生産物視点からの分析では、資本蓄積による劣等地耕作の結果「生産の費用」の増大が起り、一般的利潤率が低下する。そのことが利潤と地代との相反関係⁹⁾を生みだす。この結論を、リカードウは「蓄積の影響についての珍しい(curious)見解であり、いまだかつて注目されることのなかったものと思う」(p. 16)と自負している。

2 交換価値視点による分析

リカードウは、この交換価値視点での分析では、1で捨象した価値規定を導入する。1からこの2への移行をリカードウは次のようにのべている。

「一国の富と人とが増進している過程で、穀物の貨幣価格および労働の価格が、少しも価格変動を生じなかったとしても、やはり利潤は低下し、地代は

上昇するだろう。……しかし、一国民が富裕になり、その食糧の一部分を生産するために、より貧弱な土地に頼らざるをえなくなるにつれて、穀物およびその他すべての原生産物の価格が騰貴することはたえず示されてきた。」(pp. 18-19)

1 では、資本蓄積による劣等地耕作によって生ずる原生産物の価格の上昇を捨象して、基本的モデルの変動を考察した。2 では、1 で捨象した原生産物の価格の上昇を導入して——「産業」の商品の価格は同一に維持される——、あの基本的モデルの変動を考察する。(引用文の次の文章で農業の生産物を含む全商品の価値規定についてリカードウはのべている⁽¹⁰⁾。)

交換価値視点での分析では、利潤率の低下を1のように剰余生産物の減少より説明できない。リカードウは、1と同様に劣等地耕作のための(生産的)労働者を雇傭する追加資本に加えて、この2において生ずる穀物価格の上昇による貸銀率の増大のために必要な追加資本が加わって、一層多くの「生産の費用」がこの2では劣等地耕作に使用されるので、(農業の)利潤率が低下すると考えている⁽¹¹⁾。このことは、リカードウにとって、「当然に予期される結果〔であり——引用者〕……ほとんど考察を加えることなしに確信できる」(p. 19) ことであった。

以上のように交換価値視点での分析による利潤率の低下をのべた後、リカードウは地代と利潤についての考察をおこなっている。

まず地代について検討する。地主は資本蓄積による劣等地耕作の結果、多くの剰余生産物を手に入れるうえに、穀物価格の上昇によっても利益を得る。結局、地主は「もし彼の地代が14クォータから28クォータに増加されるならば、……28クォータとの交換において2倍以上の商品量を支配できる」(p. 20) ことになる。

資本家の取り分としての利潤については、まず農業の資本家の利潤について考察する。

「農業者の収入は、原生産物あるいは原生産物の価値で実現されるから、彼は地主と同様に、その高い交換価値によって利益をうける、しかし、生産物

の低い価格によっては、彼は大きい追加量によって償われるであろう。」
(p. 21)

したがって、この「農業者」は利潤率の低下に対する「生産の費用」の増大から、穀物価格の上昇にもかかわらず、利益をうける⁽¹²⁾。他方、彼は「生産の費用」の減少に対する利潤率の上昇から、穀物価格の低下においても利益をうける。この場合、「農業者」は、穀物価格の上昇により地主のように「2倍以上」も利益をうけないが、少なからずの利益をうけ、穀物価格の低下により地主のように「2重の損失」をこうむらず、逆に利益をうける。農業者は、結局、穀物価格の変動に関係なく利益をうける。(このことは穀物の価値規定と関係がある。)

次に「産業」資本家について考察する。「産業」の利潤率は、1と同様に2でも「資本の一般的利潤は、土地に投下された資本の最後の部分の利潤にまったく依存する」(p. 21)ので、農業利潤率に規制される。

リカードウは1と同様に2でも「産業」資本家の利潤について具体的にはのべていない。しかし、この2では彼の利潤については推察できる。その理由は、この2では、「産業」の商品の価値規定が示されているからである。すなわち、「産業」の商品の価格は、改良が生じない場合、資本蓄積による劣等地耕作が生じても「本来の価格」(p. 20)に維持される。したがって、「産業」資本家の利潤は、穀物価格の上昇による賃銀(「生産の費用」)の増大から、低下する。(同様に「産業」の利潤率も低下する⁽¹³⁾ことが上より分かる。)

この交換価値視点による分析では、「農業者」の利益と「産業」資本家のそれとは相反する場合が生じてくる。

最後にこれまでの説明ではほとんど触れられなかった労働者の取り分である賃銀について検討したいが、『利潤論』では賃銀をその理論の展開においてほとんどといていいほど考察の対象としていない。「いいかえれば、賃銀は、『利潤論』において、地代や利潤のように生産物の価値の1つの構成要素として位置付けられず、もう1つの構成要素である「生産の費用」のうちの主要な要素として取り扱われているのみである。このことは、リカードウが『利潤論』

においてその「一般的原理」の展開のなかで賃銀を独自に扱う視角を抱いていなかった¹⁴⁾ことを示している。

この交換価値視点からの分析では、リカードウは、資本蓄積による劣等地耕作から生ずる穀物価格と賃銀の上昇の結果「生産の費用」の増大し、一般的利潤が低下するという「この事実は、地主ならびに社会の他のすべての階級の利害に関係がある」(p. 20) とのべ、「地主の利害は、社会の他の階級〔具体的には資本家階級——引用者〕の利害とつねに相反する」(p. 21) と結論付けている。したがって、「この事実」以下の内容は、生産物視点からの分析での結論で示された「蓄積についてのきわめて珍しい見解」と対応している。

この対応から理解されるように生産物視点による分析の結論（「利潤の低下と地代の上昇の程度はまったく生産の費用の増加に依存する」(p. 18)）は、交換価値による分析の結論（「彼〔地主——引用者〕の地位は、食糧が欠乏して高価である時〔劣等地耕作の結果生ずる『生産の費用』の増大の場合——引用者〕、もっとも繁栄する。これに反して、他のすべての人々は、食糧を安く獲得することによって、大いに利益を得る」(p. 21)）によって具体化されたとリカードウは考えている。

(二)

『利潤論』の価値規定は、商品の価値規定を捨象した生産物視点による分析から交換価値視点による分析への移行の直後、資本蓄積による劣等地耕作から生ずる原生産物価格の上昇を確認——理論的把握ではなく日常的な認識——したことをのべた箇所あとの文章で示されている。全文を引用する。

「すべての商品の交換価値は、その生産の困難さが増加するにつれて上昇するものである。だからもし金、銀、服地、リンネルなどの生産にはより多くの労働が要求されないのに、穀物の生産においてはより多くの労働を必要とするため新しい困難が起こるならば、穀物の交換価値は、それらの物に比較して必然的に上昇するであろう。これに反し、穀物またはその他のあらゆる種類の商品の生産におけるもろもろの便宜は、同一量の生産物をより少ない労働で提供することができるので、その交換価値を低下させるであろう。こ

のようにしてわれわれは、農業上あるいは、耕作器具の改良が穀物の交換価値を低下させること、綿紡績に関係のある機械の改良が綿製品の交換価値を低下させること、そして貴金属の採掘における改良または新しいより豊富な鉱山の発見が金および銀の価値を低下させること、あるいは同じことであるが、他のすべての商品の価格を騰貴させることを知るのである。競争がその十分な効果をもつことができ、かつ商品の生産が、たとえばある種のブドウ酒の場合のように自然的制限のない場合には、それらの商品の生産の難易が、それらの交換価値を究極において調整するであろう。だから富の増進が諸価格におよぼす唯一の影響は、農業上ないし製造業上におけるあらゆる改良を別とすれば、すべての他の商品とその本来の価格にとどめておき、原生産物と労働の価格だけを騰貴させ、そうして賃銀の一般的上昇の結果、一般的利潤を低下させることにあるようである。」(pp. 19-20)

この文章の内容は3つの部分に分かれる。i) ある商品の生産の困難が増加すると、その生産に「多くの労働」が要求され、その結果、その商品の交換価値が上昇すること。ii) 金と銀（両者ともに貨幣として指定されている）の価値低下は、それら以外の商品の価格を上昇さすが、それら貴金属以外の商品の価値低下は、その商品の価値のみを低下さすこと。iii) 資本蓄積による劣等地耕作によって、原生産物の価格と賃銀のみが上昇して、他の「産業」の商品の価格は「本来の価格」に維持されるので、賃銀の上昇の結果（「生産の費用」が増大し）、一般的利潤率が低下すること。以上の3つである。これらのうち ii) は貨幣の尺度機能についてのべたものである。それ故、この ii) は商品の価値規定そのものとは直接に関係がない。したがって、以下では i) と iii) について考察する。

まず i) について検討する。商品の価値が上昇するのは、その商品の生産に「多くの労働」が必要とされるからであるという場合の「労働」の内容の考察が i) では重要である。この内容を考察するには、上で引用した文章に先立つ2つの文章を検討する必要がある。

「一国の富と人口とが増進している過程で、穀物の貨幣価格および穀物の価

格が、少しも価格変動を生じなかったとしても、やはり利潤は低下し、地代は上昇するだろう。なぜなら、原生産物の同一量の供給を獲得するためには、より多くの労働者がより遠隔のあるいはより豊度の劣った土地で使用され、したがって、生産物の価値がひきつづき同一であるのに、その生産費が増加するだろうからである。

しかし、一国民が富裕になり、その食糧の一部分を生産するためにより貧弱な土地に頼らざるをえなくなるにつれて、穀物およびその他すべての原生産物の価格が騰貴することはたえず示されてきた。」(pp. 18-19) (傍点は引用者のもの)

この2つの文章から推察できることは、富の増大につれて、より貧弱な土地、すなわち「より遠隔のあるいは豊度の劣った土地」に頼らねばならなくなり、そのため「より多くの労働者が……使用され、したがって……生産費〔生産の費用〕——引用者」が増加する」ので「穀物およびその他すべての原生産物の価格」が上昇するということである。したがって、ここでいわれている「労働」⁽¹⁵⁾は雇傭された(生産的)労働者を意味している⁽¹⁶⁾。もっとリカードウにそくしていえば、その雇傭労働者に支払われる賃銀を意味している。リカードウは、1815年3月17日付のマルサス宛の手紙のなかで、「私の考えでは穀物の価格は、使用される人間の数の増大に比例して上昇するものではなく支払われた賃銀の額の増大に比例して上昇する」⁽¹⁷⁾とのべている。

そして、この(生産的)労働者およびその賃銀には、A・スミスが『国富論』のなかでのべている「役畜」(labouring-cattle) (=生産的労働者) およびその維持費 (=賃銀) が含まれている。なぜなら、『利潤論』での「生産物をそれが生産された場所から消費される場所へ運ぶために、より多くの労働者や馬などを使用することが必要となり、……多くの資本が必要となる」(p. 13) という叙述と、「より多くの労働者が、より遠隔のあるいはより豊度の劣った土地で使用され、……生産費が増加する」(p. 18) という叙述とを比較してみると、両者ともに劣等地耕作のため追加資本が必要となるとのべている。その追加資本の内容は、前者の叙述では「労働者や馬」への支払いであり、後者の叙

述では「労働者」のみへの支払いである。これらの叙述に上で引用した手紙の、穀物価格の上昇は賃銀の額の増大に比例するという叙述をも含めて検討すると、馬も生産的労働者であり、その馬の維持費は賃銀であるというA・スミスの主張と同じ主張がのべられているといえるであろう。

以上の考察の結果、i)での価値規定は、賃銀（穀物価格に規制されている）の上昇によりその商品の価格が増大するという叙述から、「生産の費用」と「一般的利潤」（一般的利潤率に「生産の費用」を乗じたもの⁽¹⁸⁾）とで決定される。この価値規定を「生産費説」として以下で使用する。

iii)について検討する。富の増進（資本蓄積）にもかかわらず、原生産物の価格と賃銀以外の「産業」の商品の価格は変化せず、「本来の価格」に維持される。したがって、「産業」の商品の価格は、賃銀の増大にかかわらず上昇しない。それ故、「産業」の商品の価格はiii)ではi)と異なる価値規定によって決定されている。

では、i)での価値規定とiii)の価値規定とは農業および「産業」の商品にたいしてどういう関係にあるのか。農業の商品である原生産物は資本蓄積による劣等地耕作の結果、その価格が上昇することはi)およびiii)の両方でのべられている、がしかし、「産業」の商品は上でのべたようにiii)ではその価格は上昇せず「本来の価格」に維持される。

『利潤論』の価値規定は、『利潤論』直後の手紙も参考にして検討するならば、大筋では「生産費説」といえそうであるが、そういきれないところに『利潤論』の価値規定の位置がある。このように『利潤論』の価値規定に「混乱」があるのは、その「一般的原理」の論証の仕方にある原因がある。その原因は、リカードウが交換価値視点による分析では価値規定に基づいて理論を展開しようとする正しい方法を採用しながら、それを不完全な形で適用したことにある。

Ⅱ 『利潤論』における理論上の矛盾

『利潤論』における理論上の矛盾は2つにまとめられる。(一)で「一般的

原理」に内在する矛盾を、(二)で価値規定の問題点を扱う。

(一)

1. リカードウは『利潤論』における利潤率の低下を、生産物視点による分析から、次いで、交換価値視点による分析から考察している。その考察の結果、生産物視点の分析で得た結論は、交換価値視点の分析でも確認できたとリカードウは主張している⁽¹⁹⁾。

この箇所の問題にするのは、生産物視点での分析で得た結論が、リカードウの主張するように、交換価値視点での分析によっても得られるかどうかということである。生産物視点での分析では「生産の費用」の増大(200→210)と利潤の減少(100→90)とから利潤率は低下することは明白である。交換価値視点での分析では、穀物価格の上昇による賃銀率の上昇もくわって一層多くの「生産の費用」が必要となるので、利潤率が低下するというのがリカードウの主張である⁽²⁰⁾。

しかし、『利潤論』の利潤率の規定を考えるとリカードウの主張のようにはいかなくなる場合が生じる。利潤率は、全生産物の価値から「生産の費用」を引いたものを「生産の費用」で割ったものである⁽²¹⁾。その「生産の費用」のなかには固定資本、すなわち「産業」の商品が含まれている。そして、その「産業」の商品の価格は賃銀の増大があっても「本来の価格」に維持されるので、「生産の費用」のなかの固定資本の価格は同一である。したがって、劣等地耕作による穀物価格の上昇の結果、固定資本に支払われる部分に相当する穀物の量は、穀物価格の上昇以前と比較して、減少する⁽²²⁾。その減少部分の利潤へ移行する量は、場合によっては、「生産の費用」のうちの賃銀部分の上昇よりも多くなる。その時は、利潤率は低下しなくなる。

だから、交換価値視点での分析によっては、生産物視点での分析結果のごとく、利潤率が常に低下するとはいえない。このことは『利潤論』の主張にとつて重大な問題をもたらす、すなわち、『利潤論』の主張と抵触するのである。リカードウは、この欠陥を解決するために、生産物視点での分析で得た結論を交換価値視点での分析に貫徹さす視角を確立させなければならない。同時に、

この解決には、リカードウは使用価値と交換価値との関係を自己なりに解決しなければならなくなる⁽²³⁾。

2. 生産物視点での分析で得た農業資本家の利潤の減少は、資本蓄積による劣等地耕作の結果生ずる「生産の費用」の増大に基づく剰余生産物の減少のことである。交換価値視点での分析では次のようになる。

「農業者の収入は、原生産物あるいは原生産物の価値で実現されるものであるから、彼は地主と同様に、その高い交換価値によって利益を受ける。」
(p. 21)

このリカードウの分析は以下のようにもいえよう。「農業者」は、資本蓄積による劣等地耕作が生じた時、資本家——生産物視点による分析から得られた農業資本家、又は、交換価値視点による分析から得られた「産業」資本家（両者はともに生産物の量、又は、価格が一定なので、「生産の費用」の増大が生ずると利潤は低下する）——と、地主——交換価値視点による分析から得られた農業資本家——との二つの面をもっている。「農業者」のこの二面性は、『利潤論』の主要論点——利潤と地代との相反関係——と抵触する。

結局、リカードウが『利潤論』のこの主張を貫徹するためには、「農業者」を資本家として位置付けなければならない。それには、利潤の規定が交換価値視点での分析で明確化される必要がある。（これは価値規定の問題点と関係がある。）と同時に、その利潤の規定は農業資本家と「産業」資本家とを資本家——資本の人格化——として統一して把握すべき視角を必要としている。最後に、その利潤の規定はリカードウに使用価値と交換価値との関係を決着させることを要求するであろう。

(二)

1. 最初は「生産費説」という価値規定そのものについての問題である。まず『原理』のA・スミスの学説批判を引用する。（これはリカードウの自己批判として読む必要がある。）

「かれは、諸商品の価格騰貴を穀物価格の騰貴の必然的な結果とみなすことにおいて、あたかも費用の増大を支弁する基金がそれ以外にはないかのよう

に推論している。かれは利潤について考慮することを全く怠った。だが右の基金を形づくっている利潤が減少すれば諸商品の価格騰貴は起らないのである。もしスミス博士のこの見解に充分の根拠があれば、どれほど資本が蓄積されようと、利潤はけっして真実に下落するはずはない、ということになる。」⁽²⁴⁾

リカードウがここで批判しているA・スミスの学説は、確かに『利潤論』の価値規定の理論にただちにあてはまるとはいいがたい、がしかし、まちがいなく原生産物の価値規定の理論にはあてはまる⁽²⁵⁾。

穀物を含む原生産物の価値規定の理論が、このA・スミスの学説と同じであるなら、リカードウにとってそれは重大な問題を生じさず。『利潤論』の主要論点は利潤と地代の相反関係を論証することにある⁽²⁶⁾。それ故、その論証の中心的な場所は農業である。農業生産物である穀物の価値規定の理論が「生産費説」であれば、『原理』のなかでリカードウが主張する「利潤について考慮することを全たく怠る」ことが生じ、リカードウの『利潤論』での意図と相反する結果を生みだす。

結局、価値規定の理論として「生産費説」を採用することは、利潤について何もふれないことであり、利潤の規定がまったくなされないのと同じである。したがって、その「生産費説」では、利潤、そして地代（以前は利潤の一部であった）も規定できないことになる。リカードウは、価値規定の理論として「生産費説」を採用しつつけるかぎり、利潤と地代との関係を十全に把握することができない。

2. 1では価値規定の理論を「生産費説」として展開し、この「生産費説」がリカードウの意図にたいしてもつ問題点を指摘した。（これはⅡ-(二)-i)に対応している。）この2では資本蓄積による劣等地耕作の結果、穀物価格は上昇するが、「産業」の商品の価格は同一に維持されることのもつ問題点を考察する。（これはⅡ-(二)-iii)に対応している。）

リカードウはこの箇所を次のようにのべている。

「富の増進が諸価格におよぼす唯一の影響は、農業上ないし製造業上におけ

るあらゆる改良を別とすれば、すべての他の商品をその本来の価格にとどめおき、原産物と労働の価格だけを騰貴させ、そうして賃銀の一般的上昇の結果、一般的利潤を低下させることにあるようである。」(p. 20)

この引用のなかでリカードウのもっとも主張したかったのは、富の増進が「賃銀の一般的上昇の結果、一般的利潤を低下させる」ことである。その意味は以下のことである。資本蓄積による劣等地耕作の結果、原産物の価格と賃銀が上昇し、「産業」の商品の価格は同一に維持される。この時、農業では、追加労働者用の資本と賃銀率の上昇による追加資本のため「生産の費用」の増大——増大部分はすべて賃銀部分である——から農業利潤率は低下する。他方、「産業」では、賃銀率の上昇による追加資本のため「生産の費用」が増大し——増大分はやはり賃銀である——、「産業」の利潤率は低下する。したがって、賃銀の上昇より一般的利潤率は低下する。リカードウがこのように主張するのは、農業および「産業」の利潤率の低下を統一して把握しようとする考えのあらわれである。但し、「産業」の商品の価格は一定であるという前提があってはじめてこのことが主張できる。

しかし、リカードウの推論には2つの問題点がある。その1つは、農業利潤率は穀物の価格上昇が生じても低下しない場合があるということ、他は、農業と「産業」との利潤率の低下を統一して把握するために農業と「産業」との商品の価値を統一して規定する理論を放棄したことである。

以上の(一)と(二)とで示した『利潤論』の個々の矛盾を簡単にまとめる。

i) 利潤と利潤率について。「産業」では両者の低下は常に同時に存在する。他方、農業では両者が逆に動く場合がある。農業の場合のようなことが生じては『利潤論』の主張と抵触する。この解法は農業と「産業」の両部門で統一して利潤率の低下と利潤の低下を同時に生じさず利潤および利潤率の規定を求めることにある。

ii) 利潤と価値規定の理論について。上でのべたように農業と「産業」との商品の価値を統一して規定する価値規定⁽²⁷⁾であり、同時に、農業と「産業」

の「生産の費用」のうちに共通する賃銀が両部門の利潤率——同時に i) より利潤も——を低下されることを可能にする価値規定の理論が要求されている。

以上で『利潤論』の理論に内在する矛盾とそれの克服の方向（指摘のみ）とを明らかにした。リカードウは、この『利潤論』以降その矛盾の克服に向うのであるが、その場合、リカードウがどういう立場を理論的に表現するかを考慮に入れなければならない。

リカードウは、自己の自由貿易政策を主張するために『利潤論』では、「生産の費用」*(そのなかの賃銀＝穀物価格)の増大による地代の上昇と利潤の低下を論証することが必要であった。しかし、『利潤論』では、その論証が不完全であった。リカードウは、マルサスを中心とする地主側の主張に対抗しながら、その論証の欠陥を克服する必要があった。すなわち、資本の側にとって、地代と利潤の相反関係を論証することが、リカードウの、そして、『原理』の課題であった。

(註)

- (1) リカードウからの引用はすべてスラッファ版『リカードウ全集』(The Works and Correspondence of David Ricardo, edited by P. Sraffa with the Collaboration of M. H. Dobb, Londn, vol.1-11, 1951—1973)を使用する。例えば、『全集』Ⅳ, p.10. 邦訳同『全集』(雄松堂)の訳文にはかならずしも依らない。
- (2) P. Sraffa, *Introduction*, 『全集』Ⅰ, pp. xiii—lxii.
- (3) 羽鳥卓也『古典派経済学の基本問題』, 未来社, 1972年。真実一男『リカード経済学入門』, 新評論社, 1975年。中村広治『リカードウ体系』, ミネルヴァ書房, 1975年。千賀重義「初期リカードウにおける価値と貨幣の理論」『経済科学』第19巻第3号, 1972年, 61—114頁等々。
- (4) 『利潤論』の主要論点は利潤と地代との騰落の相互関係を考察することである。『全集』Ⅳ, p.9.
- (5) ここでのべられていることは、土地所有が存在しない時、および次の劣等地へ直ちに移行しなくても現在の最劣等地と同じ豊度の土地がまだ存在する時にもあてはまる。
- (6) 生産物視点での分析で商品の各構成部分の価値を表現するために小麦を使用する理由として推察できるリカードウの叙述は以下のものである。

「私の考えるところでは、貨幣と諸商品とが一定の比例を保っている間は、あ

るいはむしろ穀物で評価された双方の生産費がひきつづき一定である間は、諸商品は実質的 (materially) に騰落しえないのである。」(p. 21 の注)

これは、実質的に価値規定が捨象された場合、全商品の生産費が小麦で評価すると一定であるならば、商品の生産費を構成する諸資本 (他部門の商品) や利潤 (自部門の商品) は小麦で評価するとやはり一定であることを示している。それ故、リカードウは、「生産の費用」、利潤、地代、特に利潤と地代との量的割合を調べる尺度として小麦を使用したのである。

- (7) 『全集』Ⅳ, p. 12.
- (8) ここにおいてリカードウは差額地代を適確に把握した。『全集』Ⅳ, p. 18.
- (9) 『全集』Ⅳ, p. 16.
- (10) 『全集』Ⅳ, pp. 19—20.
- (11) 『全集』Ⅵ, p. 146.
- (12) ここでの利潤率の規定は『原理』のそれとは異なって『国富論』のそれと同じである。
- (13) 『全集』Ⅳ, p. 20.
- (14) 『利潤論』の目的は利潤を調整する原理を考察することである。それ故、「賃銀に関するかぎりにおいては、利潤についてなにも積極的に規定しえない」(p. 23) ことから、賃銀は『利潤論』の主題から排除されているといえるであろう。
- (15) 古典経済学、特にリカードウにおいては、労働日一定で、相対的剰余価値の生産のみに視点を限定し、絶対的剰余価値の生産を無視しているため、生産に「多くの労働」を必要とするということは、多くの労働者を雇傭することを意味している。
- (16) 千賀前掲論文, pp. 91—92.
- (17) 『全集』Ⅵ, p. 189.
- (18) 『全集』Ⅳ, p. 13.
- (19) 『全集』Ⅳ, pp. 18—18 & p. 21.
- (20) 『全集』Ⅵ, p. 146.
- (21) 『全集』Ⅳ, p. 10.
- (22) 『全集』Ⅵ, p. 『利潤論』では同一量の生産物を手に入れるために「生産の費用」を増大さす。しかし、『原理』では逆に同一量の資本でもって生産物量を減少さす。
- (23) 『全集』Ⅰ, p. 49.
- (24) 『全集』Ⅰ, p. 308.
- (25) 『全集』Ⅵ, p.
- (26) 『全集』Ⅳ, p. 9, p. 16 等々。
- (27) この理論の成立は、同時に、『利潤論』では欠落していた価値論固有の視角を生みだす。それは社会形成の理論である。(筆者の住所：国立市中1—7—10 荻島方)